

方言語彙「トゼン類」

八木澤 亮

1 はじめに

1.1 調査の目的

平安時代に国語化を果たした「徒然^{とぜん}」という漢語がある。文献国語史では、記録体などの変体漢文から用例が見られ、中世には抄物資料、狂言などにも出現する語である。一見、上層階級の書記言語だが、方言の世界を見渡すと、各地にこの「徒然」に由来する形式が残っている。本稿ではこれを「トゼン類」と呼ぶ。

近年、その全国分布が明らかにされつつあり、文献との対照も試みられているものの、全国的な分析が先にたち、地点をしぼった詳しい記述的調査が十分に行われているとはいえない状況がある。そこで、宮城県気仙沼市を例として、トゼン類の記述的調査を試みた。本稿の目的は、気仙沼市におけるトゼン類の語形・意味を明らかにすることである。

1.2 先行研究

まず、巨視的な視点のものから見てみたい。トゼン類の全国分布を扱った研究として、小林・篠崎（2003）、八木澤（2017）などが挙げられる。

図1や図2示したように、東北地方では宮城県・岩手県・秋田県・山形県などで、トゼン類がさかんに使用されていることがわかる。

小林・篠崎（2003）はアンケート記入式の通信法の調査であり、全国2000地点の市町村教育委員会の協力を得て、調査票を配布・回収した、大規模な言語地理学的調査である。だが、気仙沼市の調査票は回収されておらず、同市におけるトゼン類の実態は把握できていない。八木澤（2017）も、小林・篠崎（2003）のデータに拠りつつ全国的な視点から言語地理学的分析を行っているため、やはり同市におけるトゼン類の実態が明らかになったとはいえない。

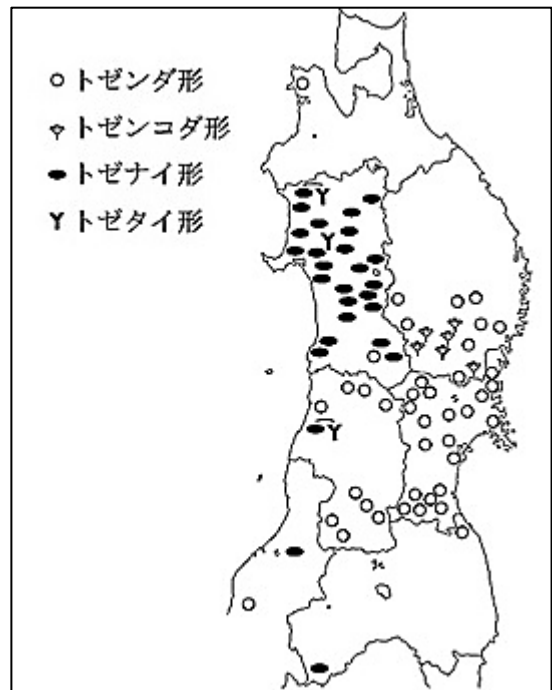


図1 東北地方のトゼン類の語形

次に、微視的な視点のものを見ていく。菅原(2006)は次のように述べている。

とぜん

『全国方言辞典』によると「退屈だ」の意。仙台はもとより宮城県全体、気仙沼地方でもよく使う。

「なんと春先あとぜんで…眠たくて…」(年寄りたちの茶飲み話から)。(90頁)

これは気仙沼市でトゼン類が使用されていることを裏付けるものだが、「退屈」といっても、どのようなときに使えて、どのようなときには使えないかが不明である。また、**図1**を見ると、気仙沼市付近では「たいくつだ」の意味も「さびしい」の意味も使用されているように見える。気仙沼市におけるトゼン類の意味の実相を、改めて明らかにしなければならないといえる。

また、宮城県気仙沼市ではないが、岩手県三陸地方を含めたいわゆる「ケセン地方」のトゼン類に言及したものとして、山浦(2000)がある。傍証のひとつとして引いておきたい。

Tozen▷静体詞^{注1}

退屈。／「徒然草(つれづれぐさ)」の「徒然(とぜん)」は「退屈」という意味。これはかつて日本中に用いられた共通語だった。今、ケセンに残っている。

Tozen nar dogi a asobi sa ko. 退屈な時は遊びに来い。

A, a, tozen dar. Nani mo sir kodo a nagi. ああ、あ、退屈だ。何もすることがない。(861頁)

これを見るかぎり、トゼン類は、文法的な役割に応じてその形態を変えている。そもそも、トゼン類の品詞は何なのか、活用といった現象は見られるのかといった点についても、調査の必要があろう。

このように、気仙沼市におけるトゼン類については、まだ明らかになっていないことが多く、研究の余地が残されているといえるのである。

2 調査について

2.1 調査方法

調査票を作成し、面接調査を行った。具体的には、従来の先行研究等からあらかじめ使用が



図2 東北地方のトゼン類の意味

期待される語形や意味を尋ねるアンケート式のような項目の他、トゼン類について自由に回答してもらい自由回答の項目も取り入れた調査票を作成した。調査票の構成は、①トゼン類を使うかどうか、使うならばその語形を確認して、②意味を尋ね、③文法的な事項についても尋ねている。

なお、調査は2017年8月に、気仙沼市民会館にて行った。

2.2 話者

調査には3人の話者に協力していただいた。なお、話者の年齢は2017年8月時点のものである。

話者 A	72 歳	男性	気仙沼市唐桑出身
話者 B	75 歳	女性	気仙沼市波板出身
話者 C	79 歳	男性	気仙沼市内 ^{注2} 出身

3 調査結果


3.1 トゼン類の使用の有無と語形


表1に、トゼン類を使うかどうか、また、使用する世代、語形をまとめた。

表1 トゼン類の使用の有無と語形

話者	使用の有無	使用する世代	語形
話者 A	使う	60 代以上	トゼンダ、トゼン
話者 B	使わない（ただし、子供のころ祖母が使っていたのを聞いた）	大正生まれの母など	トゼンダー、トゼン
話者 C	昔は使っていた	本人が 20 代のとき、50 代の人が使っていた	トーゼンダ

3人の話者はいずれも70代であり、気仙沼市の高年層がトゼン類を使用している可能性は高い。現在も使うときがある、と回答した話者Aによれば「若者は使わない」とのことで、現在の高年層とそれより上の世代が使う形式と考えられそうである。

出現した語形は、トゼンダ、トゼンダー、トーゼンダ、トゼンなどであった。形容動詞としての「トゼンダ」、形容動詞語尾の付いていない形「トゼン」の2種類に大別できるが、話者が実際に使うときには、「トゼン」ではなく「トゼンダ」の形のほうが普通であるという。これは、1の宮城県において形容動詞のトゼンダ形が多く見られたことと符合している。

話者Cは「トーゼンダ」という長音化した語形を回答した。1では、形容動詞は一括して

トゼンダ形とされているが、「トーゼンダ」という長音化した回答もトゼンダ形に含められており、たとえば、次のような語形がそれである。回答者が記入したとおりの表記で示す。

トウゼンダ (岩手県大船渡市赤崎町字後ノ入、宮城県刈田郡七ヶ宿町字柏木山、山形県上山市皆沢)

トージェンダ (宮城県宮城郡七ヶ浜町汐見台)

トーゼンダ (山形県最上郡最上町大字黒沢、山形県東置賜郡高畠町大字夏茂)

(小林・篠崎 2003 より)

このことから、気仙沼市で「トーゼンダ」という長音化した語形が見られるのは特異な現象というわけではなく、周辺地域と同様の語形だと考えられそうである。形態面での長音化現象については今後の課題とするが、「当然だ」などとの関係が考えられるかもしれない。

3.2 トゼン類の意味

意味の調査では、まず、トゼン類にはどのような意味があるかを自由に回答してもらった。その結果を表 2 に示す。

表 2 トゼン類の意味 (自由回答)

話者	意味 (自由回答)
話者 A	①たいくつだ ②ひとりぼっち、孤独
話者 B	ポツンとひとり。相手がいなくてさびしい。所在ない
話者 C	1人でポツンとしている。似たことばに「ひまつたれ」(=ひまがある) そのような状況にある人の気持ちを表すことば

自由回答の結果を見ると、トゼン類の意味には「たいくつ」と「孤独」の要素があることがわかる。また、話者 C のように、「時間をもてあます」ということも関係していそうである。

次に、小林・篠崎 (2003) の調査でも用いられた選択肢と同じ選択肢を提示して、それぞれがトゼン類のもつ意味に該当するかどうかを確認した。その結果は表 3 のようになった。

話者 A と話者 C は、表中の○の記号からわかるように、トゼン類の意味の中心は「たいくつだ」にあると回答した。話者 B によれば、「たいくつだ」のほうが「なんとなくさびしい」よりも中心的な意味であるという。したがって、話者 3 名から、トゼン類の意味は「たいくつだ」が中心的で、「なんとなくさびしい」も一応含む、という回答が得られたといえる。このことから、気仙沼市におけるトゼン類の意味は、大まかに言えば「たいくつだ」ということにはなるが、そこには、孤独によるもの寂しさが含まれており、単に「たいくつだ」ということとは異なると考えられる。次節では、調査票で「たいくつだ」「さびしい」「空腹だ」という気持ち

を感じる状況を設定し、そこでトゼン類が使えるかどうかという調査の結果について述べる。

表 3 選択肢を提示したトゼン類の意味

意味	話者 A	話者 B	話者 C
a. 「たいくつだ」	○	○	○
b. 「なんとなくさびしい」	△	○	△
c. 「とてもさびしい」	×	×	×
d. 「口ざみしい」(ちょっと間食でもしたい気分)	×	×	×
e. 「空腹だ、腹がへった」	×	×	×
f. 「わずらわしい」	×	×	×
g. 「うるさい」	×	×	×
h. 「恐ろしい」	×	×	×
i. 「すごい」	×	×	×

(○はその意味をもつ、△はややその意味も含む、×はその意味をもたない)

3.2.1 調査項目「たいくつだ」の回答

話者 A によると、トゼン類の「たいくつだ」という意味は「ひとりぼっちで、孤独でいる」ことによって生まれるという。また、「農作業をしようと思っていたが雨天によりそれができない」という状況でも「トゼンダナー」と使えるようである。すべきことができなくなって、かといってかわりにすることも特にない状況では使用可能だと考えられる。だが、「町内会の集まりで興味のない話を長く聞かなければならない」ような状況では、トゼン類は使えないという。「つまらない」の意味に近い「たいくつ」は、トゼン類では表すことができないと考えられる。

話者 B によると、「ポツンと 1 人でいて、相手がいなくてさびしい」ときに「トゼンダ」ということである。また、「やることもない」ときにも使えるという。なお、話者 A と同様に「つまらない」の意味に近いトゼン類は使えないという。

話者 C は、「1 人でポツンとして、ひまであるとき」に相手に「トゼンダ」と呟くという。また、独り言としては言わない表現のようである。また、手持ち無沙汰の雰囲気があり、ボヤーンとしていることを指すという。「つまらない」という意味では他の話者同様、使えないという。

このように、「たいくつだ」といっても、特に「孤独による所在なさ」がトゼン類の表すところだと考える。したがって、「つまらない」の意味の「たいくつ」というのとは異なり、その意味ではトゼン類は使えない。

3.2.2 調査項目「さびしい」の回答

話者 A は、親しい人が亡くなったときにはことばが出てこないほどの悲しみがあるが、しばらく経ってからならば、「アイツ イネート トゼンダナ」というように、トゼン類を使えるとのことである。これは「にぎやかさがなくなった」ことのあらわれであると思われ、「あるべきものの不在」という要因が感じられる。また、「娘が嫁に行ってさびしい」というときは、トゼン類で表すことができないほどのきわめて大きなさびしさだという。また、「遊びに来た孫が帰った」とときには、トゼン類を使えるという。さびしさの程度性がそこまで強くない事柄に関しては、トゼン類を使用することができると考えられる。

話者 B は、「〇〇さんが亡くなってさびしい」というときには、すぐには「トゼンダ」とは言わないが、しばらく時間が経ってから「トゼンダナー」とは言えるようである。この点は話者 A と共通しており、「あるべきものの不在」というさびしさを感じているものと思われる。

話者 C は、選択肢を提示して確認した意味(表 3)では、トゼン類は「なんとなくさびしい」の意味も含むと回答していたが、詳しい状況の調査になると、トゼン類には「さびしい」意味はないという回答になった。

このように、「ちょっとしたさびしさ」や「あるべきものの不在」といったさびしさについては、トゼン類が使えるようである。

3.2.3 調査項目「空腹だ」の回答

話者 A のみ、トゼン類には「空腹だ」という意味はないが、「口がトゼンダ」といえば「口ざみしい」の意味になるという。このことは、小林・篠崎(2003)において見られた次のような言い方と類似するものである。

「口がトジェンだからお茶菓子を食べる。」(宮城県牡鹿郡女川町女川浜字新田)

「口トゼネ」(秋田県南秋田郡天王町天王字天王)

このことは、トゼン類そのものには「空腹だ」という意味はないが、「口」と共起すれば「小腹がすいた」程度の意味は表せるようである。これは、「口ざみしい」という表現から類推して、そこから生まれた派生的な表現である可能性が高い。

3.2.4 意味のまとめ

以上を総合すると、トゼン類は「あるべきものの不在などによって生じる孤独感からくるたいくつき」を表すとまとめられる。したがって、対象のつまらなさに起因するたいくつきに対しては使えない。また、心理的な感覚から肉体的な感覚へと意味が転移しており、「口がトゼンダ」という言い方で「口ざみしい」の意味としても使用可能である。

3.3 文法的な事項

文法的な事項の調査結果は、表 4 にまとめた。

表 4 文法的な事項

文法的な事項	話者 A	話者 B	話者 C
「今日はトゼンダ」(述定用法)	○	○	○
「トゼンな時間」(連体修飾用法)	×	×	×
「トゼンの時間」(名詞としての「トゼン」)	×	×	×
「トゼン <u>だ</u> ろう」(形容動詞未然形)	×	×	×
「トゼン <u>だ</u> った」(連用形)	○	×	○
「トゼン <u>で</u> はない」(連用形)	×	×	△(トゼンデサー)
「トゼン <u>に</u> なる」(連用形)	×	×	×
「トゼン <u>だ</u> 」(終止形)	○	○	○
「トゼン <u>な</u> 時間」(連体形)	×	×	×
「トゼン <u>ら</u> 」(仮定形)	△(トゼンダラ)	×	○
「トゼンな人」が可能か(属性を表せるか)	×	×	×

(○はその言い方や用法が可能、△は文のかたちを変えれば可能、×は言わない)

トゼン類は、述定用法としては使えるが、連体修飾用法、名詞としての用法は使えないことがわかった。述定としては可能だが、装定としては不可能な特性をもつ形容動詞であるといえる。

各活用形については、連用形(トゼンだった)、終止形(トゼンだ)、仮定形(トゼンら)が可能であり、それ以外は言わないということであった。これは、形容動詞としての性質は残しつつも、言い方が固定されてきているものと考えられる。あるいは、述定という性質を反映したものかもしれない。ただし、形容動詞は活用があるという観点に立つならば、特定の活用形しか用いられない場合に形容動詞としての性質を十分に持っているといえるのか、疑問は残る。なお、「トゼンではない」という連用形に関して、筆者が提示したものは不可だったが、話者 C は「トゼンでない」なら可能だという。「トゼンら」という仮定形に関して、筆者が提示したのではなく、気仙沼弁の「トゼンら」ならば可能だということであった。

「たいくつな人」という意味で「トゼンな人」が可能かを尋ねたところ、話者 3 人とも不可能とのことであった。このことから、「トゼン」は人やものの属性を表す用法は獲得していないと考えられる。

4 まとめと今後の課題

今回の気仙沼市におけるトゼン類の調査では、以下のことが明らかになった。

- ①気仙沼市では、トゼン類は主に「トゼンダ」という形容動詞として使われており、周辺他地域と同じような様相を示すが、「トーゼンダ」という長音化した言い方も見られる。
- ②その意味は「あるべきものの不在などによって生じる孤独感からくるたいくつき」を表す。「ロがトゼンダ」という言い方で「ロざみしい」の意味としても使用可能である。
- ③基本的に述定用法しかなく、わずかに活用するだけである。属性形容詞のような、属性を表す用法は獲得していない。

なお、今回の調査では、「たいくつき」や「さびしさ」を表す語彙の体系のうちで、トゼン類がどのような位置を占めるのか、詳しいところまではわからなかった。この点は、あらためて記述調査の課題としたい。

注

- 1 山浦によれば、実体の属性を表現する活用のない語。学校文法で形容動詞と言われるものの語幹を指す。
- 2 話者 C は幼少期に気仙沼市内を転々とされたということで明確な地名を回答されなかったため、出身地は気仙沼市内としている。

文 献

- 小林隆・篠崎晃一（2003）『消滅の危機に瀕する全国方言語彙資料』科学研究費報告書
菅原孝雄（2006）『けせんぬま方言アラカルト増補改訂版』三陸新報社
八木澤亮（2017）「方言と文献から見た漢語「徒然」の語史」日本方言研究会編『日本方言研究会第105回研究発表会発表原稿集』p.1-8
山浦玄嗣（2000）『ケセン語大辞典下』無明舎出版